**「ラーマクリシュナの福音」勉強会　第７４回　（２０２１年４月１１日）**

**・勉強範囲：「第三章　ヴィディヤー・シャーゴル訪問」４０頁**

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**（４月１１日の講義を記録した映像データについて）**

①『ラーマクリシュナの福音』の本読みの箇所が違っています。

（誤）４１頁上段2行目から

（正）４０頁下段１１行目から

②３月の勉強会の復習：補足です。ナーラダのバクティ・スートラの各助言は「神への愛をあらわしたい」という神への愛着（霊的な欲求）［👉『ナーラダ・バクティ・スートラ　～信仰の道についてのナーラダの格言集～』p161］を表現したものです。

　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～　　❀　　～

**（今回の勉強）『福音』４０頁下段L１１**

*（ヴィディヤー・シャーゴルに）「あなたが行っている活動は良い。もしそれらを無私の精神で、うぬぼれを棄て、自分が行為者であるという思いを棄てて行うことができるなら、非常によろしい。*

**（解説）**

無私。英語版ではselfless spirit、ベンガル語の原著ではニシカーマ・カルマ（このベンガル語はサンスクリット語と同じです）となっていて、ラーマクリシュナ僧院ではselfless spiritをいつも「ニシカーマ・カルマ」と言っています。

（板書）

Nih-kāma Karma　→　Nishkāma Karma

Sa-kāma Karma

「ニッヒ・カーマ・カルマ」を続けて読むと「ニシカーマ・カルマ」となります。ニッヒは「無い」という意味の接頭辞、カーマは「欲望」（カーマには他に肉欲という意味もあります）──ニシカーマ・カルマとは「欲望のないカルマ」ですから、カルマ・ヨーガと同義です。反対に欲望のあるカルマはサカーマ・カルマと言います。またカルマには必ず目的があり、その目的には良い目的／非利己的な目的／無私の目的の場合もあれば、利己的な目的の場合もある、というのも大事なポイントです。

　シュリー・ラーマクリシュナは、マニ・マリックなどお金持ちの信者たちが「自分のお金を学校建設などの良い目的のために使いたい」と言うと、いつも「名声欲のためにそれをしないなら良いことだ」と言いました。同じ助言をヴィディヤー・シャーゴルにもしていますが、シュリー・ラーマクリシュナは「お世話のためだけが理由ですか？　あなたの心の中に、潜在意識の中に、有名になりたいという気持ちはないですか？」と言っています。有名になって世間に褒められることと霊性とは全く違いますし、最初は欲望なくカルマをしているつもりでも後から無意識のうちに欲望が入ってくる場合もあります。シュリー・ラーマクリシュナは「それには気をつけてください」と注意を促し、『福音』の中ではニシカーマ・カルマが難しいようならナーラダが説くバクティ・ヨーガの道を勧めています。

しかしスワーミー・ヴィヴェーカーナンダが言ったことは何でしたか？　それはニシカーマ・カルマです。スワーミージー（スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）は他者をお世話してください、お世話してくださいと言っていました。シュリー・ラーマクリシュナの助言は年長者やお金持ちの人たち中心のもので、スワーミージーは若い人たちを中心にした助言でした。ですからスワーミージーが創ったラーマクリシュナ僧院にもカルマ・ヨーガの時間があるのです。僧院の僧たちはヒマラヤに行って瞑想してはいません。社会にあって、社会の中で、看護、寮の管理、学校の従事、牝牛の面倒を見る、庭の管理など様々なお世話をしています。

『ラーマクリシュナの福音』を読んで、「シュリー・ラーマクリシュナはカルマはあまりしない方がいいと言っているのに、なぜラーマクリシュナ僧院は仕事ばかり勧めるのか。それでは瞑想の時間が短くなるではないか」と疑問を持つ人がいます。実際、僧の中でもそのように思う人もいます。なぜスワーミージーはカルマ・ヨーガを勧めたのでしょうか？

**カルマ**

ここで「カルマ」という言葉の意味について少し説明します。

肉体だけでなく、感覚、心、知性のレベルでの活動・行為はすべてカルマです。息を吸うや吐くも、見るや聞くも、心で考えるのも、知性で識別するのもカルマです。瞑想もジャパもカルマです。そのような包括的な意味で「カルマ」は使われています。

また、儀式という意味で使われる場合もあります。シャンカラーチャリヤは「ギャーナ・ヨーガの方法でブラフマンを悟りたいなら、カルマは障害になる」と注釈しましたが、そのカルマの意味は儀式で、「儀式という意味のカルマをするとブラフマンを悟ることはできない」と言ったのです。なぜなら儀式を行うということは、長命、敵のせん滅、一国の王になる、天国に行くなどの儀式の結果を求めることだからです。

『ラーマクリシュナの福音』では、カルマをある時には儀式、ある時には義務（仕事、活動）という意味で使っていて、そのどちらが相応しいかは前後の文章をくみ取って理解しなければなりません。また、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの『カルマ・ヨーガ』に出てくるカルマはほとんどが義務という意味です。

シャンカラーチャリヤのカルマのイメージ、『福音』のカルマのイメージ、スワーミージーが『カルマ・ヨーガ』で説いたカルマのイメージはそれぞれ少しずつ異なるということは、よく考慮しなければなりません。

**ニシカーマ・カルマだけで悟ることができる**

現代社会では儀式はほとんどしなくなり、僧院の僧も含めて皆一般的な義務や仕事をして働いています。非道徳的でなければ、どの種類のカルマをしようと問題はありません。その上でシュリー・ラーマクリシュナがヴィディヤー・シャーゴルに言っていることは、カルマを「何の態度をもってするか」ということです。その態度によってカルマがニシカーマ・カルマになったり、サカーマ・カルマになったりするからです。

スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの強調はニシカーマ・カルマであり、「ニシカーマ・カルマだけで悟ることができる」と言っています。彼の講演集『カルマ・ヨーガ』の中には肉屋という仕事だけで、主婦という仕事だけで悟った話が引用されています。（👉『カルマ・ヨーガ』スワーミー・ヴィヴェーカーナンダ　2008年版　p98）

シャンカラーチャリヤなどの伝統的ヴェーダーンタ哲学者は「ニシカーマ・カルマを通じて心をきれいにした後にはさらに実践が必要である。それはブラフマンに集中して瞑想することであり、そうしなければ悟ることはできない」と考えていました。しかしスワーミー・ヴィヴェーカーナンダはそのように考えてはいませんでした。彼はニシカーマ・カルマの次の段階がなくても、ニシカーマ・カルマだけで悟ることができると主張したのです。その論理、ロジックは何ですか？　「ニシカーマ・カルマによって心が完全に浄化されたら、自然に『内なる自己』があらわれる。それが悟りである。それならなぜ瞑想という努力を追加して行う必要があるのか？」というものです。

「無私をもって仕事をしている」という意味は「身体、心、自我の私がなくなった」ということです。仕事は他者のために行われ、自分のためには何もしていません──そこまでいくと、もはや悟りの障害はなくなり、「内なる自己」があらわれてきます。結論は、「ニシカーマ・カルマだけで悟ることはできる」のです。

ある僧がトゥリヤーナンダジーに疑問をたずねました。「ヴェーダーンタの有名な学者が『あなた方はニシカーマ・カルマをしているようだが、それだけでは悟れない』と言っていました」。トゥリヤーナンダジーは「スワーミージーがニシカーマ・カルマだけで悟りはできるとおっしゃったのだ。シャンカラーチャリヤの意見がたとえそうであっても、スワーミージーはシャンカラーチャリヤより決して低いレベルの方ではない。少なくとも一緒のレベルだ。だからスワーミージーの言うことは絶対に正しい」と答えました。ニシカーマ・カルマは、スワーミー・ヴィヴェーカーナンダがその考えを明らかにしたときから本当に１つの悟りの道となりました。

**サカーマ・カルマ**

次はサカーマ・カルマについて考えてみましょう。カーマ（欲望）には粗大的な目的もあれば精妙な目的もあります。粗大な目的とは、たとえば自分の生活のレベルアップのための食事、服、家（建物）にまつわるものです。それは自分と自分の家族のためのもので利己的な目的なので、すべてサカーマ・カルマです。精妙な目的とはたとえば名声欲です。サカーマ・カルマ（利己的な仕事）の結果で、執着、心配、ストレス、うぬぼれ、強欲になる可能性、輪廻に束縛される可能性があります。自分の仕事が自分と家族のためだけで自分と家族を甘やかすだけだったら、そこから執着が生じ、それによって苦しみ悲しみ束縛に至ります。何回も生まれ変わらなければならず、解脱は無理、幸せも無理です。

**何の仕事でもよい、それを「どのような態度で行うか」が大事**

ニシカーマ・カルマは、サカーマ・カルマと同じ仕事や義務を行いますが、態度と目的が違います。誤解しないで欲しいのは、特別な仕事をしたら悟れるということではない、ということです。仕事の（いわゆる）高低、神聖や神聖ではない、世俗的や霊的などは悟りと関係ありません。どんな仕事でも悟りはできます。重要なことは「何の態度でその仕事をするか」です。

仕事が上手で完璧に出来る人はいます。そしてその人を見て、多くの人は「ああ、あの人はとても上手に仕事をしている。カルマ・ヨーギーに違いない」と誤解します。ですがそれは同義ではないことがほとんどです。ミスなく完璧にたくさんの仕事をするEfficient worker（有能な働く人）とideal worker（理想的な働く人）とは異なるのです。

その人がカルマ・ヨーギーかどうかは、その人の仕事の結果を観察して分析すれば分かります。仕事の結果、ストレスが生じている、仕事をしても幸せではない、苦しみ、悲しみ、嫉妬、うぬぼれがなくならないようなら、その人は有能であってもカルマ・ヨーギーではありません。ストレスがない、幸せ、満足を得ているようなら、その人はまさしくカルマ・ヨーギーです。これがEfficient worker（有能な働く人）とideal worker（理想的な働く人）の見分け方です。

ですがEfficient workerはideal workerへの準備がかなり進んでいるということも正しいです。Efficient workerはカルマの目的を神に向けるだけですぐカルマ・ヨーギーになれるからです。タマス的（怠け者、仕事をあまりしない、ミスばかり）な働く人はすぐサットワ的にはなれませんが、ラジャス的な働く人は次にサットワ的になれます。ですからラジャス的に働く人は、利己的な目的で仕事をせずに非利己的、神を喜ばせるために仕事をしてください。これは私たち働く者にとって肯定的なポイントです。カルマ・ヨーギーの次の段階は悟りです。今すぐ仕事の目標・目的を高い目標へと変えてください。すると別の実践をせずともカルマ・ヨーガだけで悟ることができます。

**仕事は神への礼拝**

その最高の目標が「仕事は神への礼拝」とすることです。仕事を私の仕事と思わず、「私は毎日神を礼拝するために仕事場に（出かけて）います」とイメージをし、仕事を神への礼拝と意識して行ってください。すべてが神の礼拝──会社での仕事も礼拝、キッチンの仕事も礼拝──ですから仕事について、「これは礼拝、これは礼拝ではない」と分けないでください。「これが仕事、これが礼拝」という分け方をすると、カルマ・ヨーガができなくなりますし、カルマ・ヨーガができないということで霊的実践の時間も減ってしまいます。

私たちの問題は、これが瞑想、これが礼拝、これが世俗の仕事と分けて考えていることです。そうではなく、今ヴェーダーンタ協会で礼拝をしました、今オフィスに行って礼拝します、今キッチンに入って礼拝します、という態度で実践をステップアップしていくと、work（仕事）とworship（礼拝）の違いがなくなって、スワーミージーが言ったように「仕事は礼拝になります」（work becomes worship.）。

それはヴェーダーンタ哲学の言っている、「別々はない。すべてが霊的」ということと同じです。この部分が霊的で、この部分が世俗的ということはないのです。なぜならブラフマンはどこにでもいますから。祭壇の中にも、オフィスにも、キッチンにも、神は、ブラフマンはいますから。仕事が礼拝になったときにはオフィスが寺院になり、キッチンが神殿になるのです。そうなれば、特別な霊的実践の時間の必要はなくなります。そうなったら朝から夜まですべての時間が霊的実践の時間で休憩はなくなります。ラーマクリシュナ僧院の僧たちは皆そうです。

ロビン・マハーラージは獣医系の大学を卒業して獣医の資格をとった後にラーマクリシュナ僧院に入りました。その方は今まで３０年位をベルル・マト本部の牝牛の面倒を見る仕事に従事し、僧院に牛乳を供給しています。ですが普通は３０年も同じ仕事だとイライラしませんか？　しかしその方はシュリー・ラーマクリシュナを喜ばせるという動機と目的でその仕事をしています。神中心の仕事です。セルフ・セントリック（私中心）ではなくゴッド・セントリック（神中心）で仕事をしています。それがラーマクリシュナ僧院の仕事のしかたです。

**Siva-jnāne jiva sevā（シヴァッギャネー・ジヴァセーヴァー）の意味**

「神中心でカルマをする」ということは、奉仕やお世話というカルマも「社会的な奉仕活動をするのではなく、霊的な奉仕活動をする」ということです。それが「Siva-jnāne jiva sevā」というラーマクリシュナ僧院の基本理念です。

・Siva-jnāne jiva sevā（シヴァッギャネー・ジヴァセーヴァー）

＝「シヴァ神の存在」（＝Siva-jnāne）を「生きもの」（＝jiva）の中に見て「お世話をする」（＝sevā）こと

このアイディアはスワーミージーがシュリー・ラーマクリシュナから受けたインスピレーションによって始まりました──その時シュリー・ラーマクリシュナはヴィシュヌ派の３つの実践（①ナメルチ＝ヴィシュヌ神の御名を愛すること、②ジヴェー・ダヤー＝慈悲をもってお世話をすること、③ヴァイシュナヴァ・セーヴァー＝ヴィシュヌ派信者のお世話をすること）について語っていました。するとシュリー・ラーマクリシュナは突然特別な霊的ムードに入られ、「ジヴェー・ダヤー？　慈悲をもって人を助けるとは何と愚かなこと！」とつぶやかれたのです。（👉『ラーマクリシュナの生涯　下巻　2007年版　p455』

もし慈悲の心で奉仕すると、「自分は奉仕する相手より高い」という意識や「私は助けてあげている」といううぬぼれが出る可能性があります。すると信者はよくない結果（エゴやうぬぼれ）を受け取るばかりか奉仕活動によってさらに自我意識が強まります。ですからシュリー・ラーマクリシュナは「ジヴェー・ダヤーではなく、シヴァッギャネー・ジヴァセーヴァーであれ」と言ったのです。何人もの人がその話を聞いていた中で、シュリー・ラーマクリシュナの言葉の真髄を理解したのはナレーンドラ（のちのスワーミー・ヴィヴェーカーナンダ）だけでした。

**奉仕は社会的な奉仕にせず、霊的な奉仕にしなければならない**

（板書）

✖Jive dayā

Siva-jnāne jiva sevā

シュリー・ラーマクリシュナの言葉を聞いて、ナレーンドラは友人に言いました、「今日は本当に素晴らしいアイディアを聞いた。もし神の恩寵でチャンスがあれは、私はそのことを皆に教えたいし、自分も実践したい」。それが、ラーマクリシュナ僧院が創設された目的です。すなわち「みずからの悟り」と「すべての人をお世話すること」で、その悟りの大きな方法がニシカーマ・カルマ、Siva-jnāne jiva sevāという方法のセーヴァー（奉仕、お世話）なのです。

ニシカーマ・カルマをするとお世話は礼拝になり、うぬぼれは生じません。それがスワーミージーが始めたお世話の方法であり、社会奉仕団体によるお世話との大きな違いです。私たち僧院のお世話は霊的な奉仕で、目的が悟りや心の浄化にある、ということです。一方、赤十字社などsocial service groupの奉仕は社会的な奉仕で、（奉仕はもちろん良いことですが）すると今日のはじめにも言いましたが後になって名声欲が生じたり、ストレスや失望もあり得ます。スワーミー・ヴィヴェーカーナンダの強調は「奉仕は社会的な奉仕にせず、霊的な奉仕にしなければならない」ということでした。これはとても大事なポイントです。

**奉仕の相手に区別を見ない**

ニシカーマ・カルマのもう１つの大事なポイントは「奉仕する相手を区別しない」ということです。宗教の区別、支持政党の区別、学派の区別、邦人異邦人の区別、仲間であるなしの区別をせず、すべての人に奉仕します。

**奉仕は私に与えられた特典である**

さらなるポイントは、「奉仕は奉仕する人の特典（privilege）である」ということです。シヴァーナンダジー（シュリー・ラーマクリシュナの直弟子の１人）が僧にたずねました、「あなたは僧院の仕事をいろいろしていますが、どのような態度でしていますか？（what is your attitude？）」。僧は「私はこの仕事はmy privilege（特権、特典、恩恵）であり、special opportunity（特別な機会）だと考えてしています」と答えました。聖書にもこのような有名な言葉があります、「呼ばれるものは多く、選ばれるものは少ない（Many are called but few are chosen.）」（👉マタイによる福音書22章14節）。意味は「たくさんの信者がいるが、神のために仕事をする人は少ない」ということです。

仕事は「この仕事は私の特典だ（It is my privilege.）」という態度で、「たくさんいる信者の中で、神はこの仕事をなさるために私を選んだのだ。これは私に与えられた特別なチャンスだ。なんとラッキーであるか！」と考えて行うことが大事です。つまりはお世話される側がありがたいのではなく、お世話する側がありがたい（be grateful）のです。なぜならシュリー・ラーマクリシュナが私のことを選びましたから──これが重要な態度です。ですが普通はそれと反対の考えですから、奉仕させていただいてありがたいと考えることはなかなか難しくてできません。

**何も期待しない**

もう１つの大事なポイントが「期待しない」ということです。自分への称賛を期待しませんし、もちろん間違いの指摘を期待する人はいませんが、指摘されると気持ちがよくないですからそのことも期待しません。つまり「何も期待しない」「何も構わない」という態度です。

**執着しない**

また「執着しない」ことも大事なポイントです。シュリー・クリシュナはブリンダーバンのゴーピーたちをとても愛していましたが、ブリンダーバンから去るときには無執着で行きました。ブッダ・デーヴァもたくさんの仕事をしていましたが執着は全くありませんでした。スワーミージーのことも考えてください。仕事に利己性や執着は全くなかったです。

**ニシカーマ・カルマのポイント（どのような態度でカルマを行えばニシカーマ・カルマになるか）をまとめます。**

・エゴ中心→神中心　＊ナーハムナーハムトゥフートゥフー（私ではない、私ではない、神様あなたです、あなたです）

・慈悲からお世話するのではなく、人の中の神にお世話をする　＊シヴァッギャネー・ジヴァセーヴァー

・区別をせずにお世話をする

・期待をせずにお世話をする

・褒められてもけなされても構わない

・お世話するのは自分の特典、特別なチャンス、ありがたい

・カルマをしても執着しない

**ニシカーマ・カルマだけで悟った実例**

私はカルマ・ヨーガだけで悟った先輩の僧たちを知っています。私のグルやアバヤーナンダジー、ムクターナンダジーです。今日はベナレスのアシュラムにいたムクターナンダジーについて私が見たことを述べます。

出家前の名がバンビハリだったので、ムクターナンダジーはブンババ（ババ＝お坊さん）と呼ばれていました。ベナレスには有名なシヴァ寺院があって人々はシヴァ神を慕っていますが、皆はブンババを「動くシヴァ」と言って尊敬していました。マハーラージの仕事は病院で包帯を巻く仕事でした。

そのベナレスの病院（Ramakrisha Sevashram）はスワーミー・ヴィヴェーカーナンダのカルマ・ヨーガを理解したチャルーさん（Charu babu）という若者によって創設されました。その方はのちに出家してShubhananda（シュッボハーナンダ）となりました。その病院では病人を患者（patient、ベンガル語でローギー　＊ローグは病気）と言わず、「ナーラーヤナ」（神の一名）と呼んでいました（日本ヴェーダーンタ協会でも相手にナーラーヤナを見て奉仕する活動があります）。キッチンもサドゥ・バンダヤ（僧用のキッチン）の他にナーラーヤナ・バンダヤがあるので普通の人はちょっと混乱していました。キッチンも、服も、ベッドも、すべてナーラーヤナのために整えられていました。ある新米の僧が「今日は２０人の患者が入院しました」と報告に来たときには先輩の僧は「２０人の患者ではない。２０人のナーラーヤナだと」と厳しく注意しました。ナーラーヤナと呼ぶのは「患者を礼拝する」という実践です。実際にシュリー・ラーマクリシュナの誕生日には患者たちを礼拝する儀式をしています。その日は僧侶もスタッフも患者の元に行き、花輪やサンダルペーストや供物を捧げます。（インターネットからその写真を見せる）

ブンババ・マハーラージの仕事はdressing、包帯を巻く仕事でした。それも４０年位全く同じ仕事でした。医者も嗅ぎたくないほど腐った臭いのする傷の面倒も見ていました。マハーラージは常に立った状態で仕事をし、月曜から土曜まで働き日曜だけ休むというサイクルで働き続けました。１度だけ巡礼地に行ったことがありました。しかしそれ以外はベルル・マト本部に行くこともなく仕事をしていました。なぜそうしたのですか？　それはグルであるシヴァーナンダジーから「ベナレスに行って、そこでお世話をしてください」と言われてそれに従っていたからです。

マハーラージの包帯だけで、ひどい膿（うみ）の傷が治癒することも多々ありました。ヒンドゥ教徒だけでなく、近所に多く住んでいたイスラーム教徒も含め、すべての人を区別せずにマハーラージは面倒を見ていました。彼らは皆このような信仰を持っていました、「マハーラージに包帯を巻いてもらうだけで、マハーラージがそのようにして触るだけで、皮膚の傷は絶対に治る」と。

マハーラージは長年の立ち仕事からリューマチを患い、やがて膝を曲げることができなくなりました。私は見ました。そんな身体状態でも１本の杖をついて仕事場に行き、他の人に手伝ってもらいながら包帯を巻く仕事をしていました。そして「どうしてあなたは腐った臭いを気にしないのですか？」と聞かれると、「私に腐った臭いはまったく入ってきません。だから問題ありません」と答えていました。それだけでなく、マハーラージはサルの傷も治しました。サルは人々がマハーラージに包帯を巻かれているのを見ていました。ある日傷を負った野生のサルがやって来てマハーラージにその傷を見せました。マハーラージは何も怖がらずにサルに包帯を巻きました。何度か繰り返して面倒を見たのち、サルの傷は治りました。

私はマハーラージの性格の特徴、カルマ・ヨーガだけで悟った人の特徴を皆さんに教えたいと思います。

マハーラージの顔はいつもとっても明るくて、いつもスマイルでした。そして他の人がマハーラージにプラナームすると、マハーラージもその人に向かってずっとプラナーム（手を合わせて拝んで頭を下げるジェスチャーをする）していました。それは若い僧に対しても変わらず、マハーラージが８０歳を過ぎても同じでした。私はマハーラージから、他者や他の僧に対する批判の言葉を一度も聞いたことはありませんでした。マハーラージの昼食は１３時や１４時といった遅い時間でしたが「食事をあたためてください」などの、自分のための特別なデマンド（頼み事）は何もしませんでした。年を取っても皆と同じ食事をとっていました。ベナレスは冬寒く、夏はとても寒いのですが、マハーラージはいつもベランダに寝ていました。私は中のことはわかりませんけれども、外から見ると、全く（他の人と）違いました。

ベルル・マト本部が私に日本行きの打診をしたとき、私は巡礼地に行っていてその経由地であるベナレスに戻ってきたところでした。そこで私はマハーラージに聞いたのです、「本部は『あなたは日本に行ってください』と言っています。私はどうしたらよいでしょうか？　日本に行った方がいいでしょうか、行かない方がいいでしょうか？」。するとマハーラージは「行ってください、行ってください、日本に行ってください、タクールの仕事ですから大丈夫」と答えました。私も「マハーラージもそう言っているから、日本に行ったほうがいい」と考えました。マハーラージの身体は、今はなくなりました。

（賛歌奉献：映像データの１：５０：４０位）

「トゥミブランマ　ラーマクリシュナ　トゥミクリーシュナ　トゥミラーム

トゥミーヴィーシュヌ　トゥミジーシュヌ　プラブヴィーシュヌ　プラナラーム

トゥミブランマ　ラーマクリシュナ」

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　以上